

日本組合教会の朝鮮伝道における一考察 — 渡瀬常吉の初期朝鮮伝道を中心に

斐 貴得

立命館大学大学院文学研究科博士後期課程

要旨

1911年から朝鮮伝道を開始した日本組合教会の渡瀬常吉は、当初京城と平壤を中心に伝道活動を行っていたものの、なかなか信者が増えないことに悩んでいた。そのなか、1910年に反宣教師・反教権を提唱しつつ、長老派から独立を図っていた自由派の車学淵と出会う。その後渡瀬の朝鮮伝道はこの自由派の参加に支えられることで、教勢を伸ばしていくこととなる。独立教会の日本組合教会への加入は、渡瀬の朝鮮伝道における伝道方針を大きく変え、ついに朝鮮教化という名目で「国民的運動」を訴えることとなる。渡瀬は朝鮮の教化活動について、それを自らの純粋なキリスト教信仰に基づくものとして、朝鮮民族と帝国日本のために行ったとしている。これまでの日韓キリスト教関係史では渡瀬ら日本人の朝鮮伝道が日本帝国主義にどの程度加担、もしくは抵抗していたかのみで評価されてきた。だが、ここで問われるべき問題は渡瀬の主観的な意図ではない。渡瀬が純粋な信仰に基づく行いであると信じていた宣教活動それ自体の歴史性とそれが内包する同時代的・今日的意味が何であるかである。

キーワード

日本組合教会、渡瀬常吉、朝鮮伝道、自由教会、国民的運動

はじめに

1911年から朝鮮伝道を開始した日本組合教会の渡瀬常吉は、当初京城と平壤を中心に伝道活動を行っていたものの、なかなか信者が増えないことに悩んでいた。そのなか、1910年に反宣教師・反教権を提唱しつつ、長老派から独立を図っていた自由派の車学淵と出会う。その後渡瀬の朝鮮伝道は自由派独立教会の加入を通して教勢を伸ばしていくこととなる。さらに、渡瀬は1913年『朝鮮教化の

急務』を刊行し、朝鮮伝道を日本の「国民運動」として訴えていく。

さて、近代日韓関係史のなかでキリスト教の歴史認識を考察する梁賢恵は、全羅道と忠清道地域における独立教会の日本組合教会への加入という事態について、「植民地支配国の教会である組合教会に身を置くという矛盾的な結末に至ったのは、植民地教会の悲哀な一面を表している」と評価している。このような評価の根底には、植民地支配国に抵抗する朝鮮の教会としての「民族教会」像がその前提として据えられており、支配国の教会に協力する独立教会は「民族教会」を裏切る「異端的なもの」にほかならないという認識が含まれているといえよう。

一方、植民地朝鮮における日本系宗教の諸活動に関する近年の研究では、日本系宗教の諸活動をアジア諸国に対する精神的侵略としてのみで捉える、一国史的な眼差しを批判的に捉えようとする試みが現れつつある。そのなかでも、植民地朝鮮における日本系宗教の布教活動を通して日本と朝鮮の相互関係を考察した諸点淑と金泰勲の研究は示唆に富む。まず、植民地朝鮮における日本仏教の社会事業を近代化という歴史的な文脈のなかで扱う諸の研究は、支配国による抑圧とそれに対する抵抗として描かれてきた「植民地朝鮮」という場を、日本と朝鮮の人々の相互関係のなかで生じる近代的「欲望」と「葛藤」が交差する場として力動的に捉え直している²。

一方、1910年前後における宗教状況を中心に植民地朝鮮における宗教概念の問題を考察している金の研究は、宗教概念の問題を「内地」(日本)と植民地(朝鮮)の相互影響関係の中で把握している³。とりわけ、金の研究は宗教概念の定着過程を日本と植民地朝鮮における同時代的・連続的過程として捉える帝国史的観点を提示した点で、高く評価できる。さらに、宗教概念の帝国史的展開という観点から、日本と植民地朝鮮のあいだで形成されていく両者のアイデンティティのありさまと、宗教概念を媒介として相互の内部に引き起こされる矛盾が見事に描き出されている。

その意味で、植民地／帝国期における宗教をめぐる研究は新しい地平を開きつつあるといえよう。しかし、これらの研究が提示する観点はあくまで日本と植民地朝鮮という両者の関係だけを射程に入れており、西欧との関係性が抜け落ちているといえる。植民地朝鮮における宗教を世界史的状況のなかで語り直すためにも、日本、植民地朝鮮、西欧との相互関係に注意を払っていく必要があるのではないだろうか。

以下、本論ではかかる問題意識のもとで、日本組合教会の朝鮮伝道を西欧宣教師(アメリカ)と朝鮮教徒の関係、日本宣教師と朝鮮教徒の関係という三者の関係を軸に、そこで生じていた問題を同時代的に捉え直してみたい。

1. 渡瀬常吉の生涯

まず、『朝鮮教化の急務』の内容に入るまえに、渡瀬の一生を概略的に述べておきたい。そのうえで、『朝鮮教化の急務』が書かれた1913年を中心に日本と朝鮮の時代的動向をみていきたい。

渡瀬は1867(慶応3)年、八代藩士の長男として生まれ、1882年ごろ、大江義塾に入り徳富蘇峰の門下生となった。1885年、故郷の八代教会(組合教会)でO. H. ギューリックによって受洗。しかし、常吉の二人の弟たち(昌雄、主一郎)が同志社の神学校を出て、牧師になったのとは異なって、彼は神学校で学ぶことはできなかった。その後1890年に熊本英学校校長であった海老名弾正に招かれて同校の国語教員となった。

渡瀬が勤めていた熊本英学校は、徳富蘇峰の上京によって大江義塾が閉校されて以後、大江義塾に残されていたものと、組合教会の講義所(後の草葉町教会)の信者によって設立された熊本英語学会の設立がその始まりである⁴。渡瀬は1888年熊本英語学会が熊本英学校と改称されるその年に、海老名によって招かれたのである。その後、渡瀬は1894年に上京して本郷教会の牧師となり、また組合教会の機関誌『基督教新聞』(『基督教世界』の前身)の主筆を担当した。朝鮮との直接的な出会いは、1899年大日本基督教徒教育会の副会長であった押川方義の推挙によって、京城学党⁵の学長を委託されたときからである。

約10年間の京城学党学長を務めた渡瀬は、1907年に按手礼を受けて神戸教会の牧師となる。1910年の日韓併合直後、同年10月に開かれた組合教会定期総会において、朝鮮人伝道の開始が決議され、渡瀬は朝鮮伝道主任として選出される⁶。翌年6月にソウルへ渡った渡瀬は、1913年から1917年までの5年間、教師数22名から98名に、教会数45ヶ所から143ヶ所に、教会員数3,600名から12,679名にという実績を上げ、会費も6千余円から1万7千5百余円となり、これに臨時費を加えれば2万5千百余円となる規模にまで朝鮮伝道を成長させていく。しかし、1919年に起きた3.1独立運動をきっかけに信者数は急激に減少することになり、結局渡瀬は、日本の本郷教会で開かれた第37次総会で朝鮮伝道の廃止案を提出することとなる。1922年9月、朝鮮伝道部所属の教会を「朝鮮会衆基督教会」と改称し、組合教会から分離・独立させた。

その後、1925年、名古屋に東海教会を設立するが、1934年満州に渡り、新京教会を設立する。しかし、新京における彼の伝道活動は、信者が集まらなかったため、3年間の予定であった新京生活を2年間で打ち切って東京に帰ることとなる。そして1936年10月、35年間在職していた組合教会牧師から引退する。1940年には「日本精神を体得し、西洋かぶれをしていない伝道師」を養成することを目的とする興亜新学院を東京に設立した⁷。だが、1944年1月、朝鮮の友人から

の手紙を受け取り、朝鮮におけるプロテスタントの各教派を統一させようという総督府に力を貸すために朝鮮へ渡る⁸。しかし、同年10月、京城の街頭で脳溢血で倒れ、一週間後の10月14日に78歳で世を去る。

2. 初期朝鮮伝道における状況

1) 自由教会との出会い

渡瀬が1914年に書いた朝鮮伝道の旅行記である『ひづめの跡』には、渡瀬の初期(主に1912年の伝道活動)における朝鮮伝道の状況が詳しく記されている。渡瀬が『ひづめの跡』のはしがきで書いているように、

朝鮮の教化が一日を緩ふすべからざる急務たるを世に訴へん為め「朝鮮教化の急務」と題せる小冊子を刊行したのであるが同時に朝鮮に於ける傳道上の實際を書き現はしたものがあつたら一層彼の地の状況が分り同情を惹くであらうとの諸友の注意に由りて曾て各地傳道旅行のあらましを記したものとそれに最近の状況を附加し題して「ひづめの跡」としたのが此の冊子である⁹。

とその刊行の目的は、彼が1913(大正2)年に書いた「朝鮮教化の急務」と同様であることが明らかである。渡瀬は自分の朝鮮伝道旅行記を、ある一人の朝鮮伝道師の話から始めている。その伝道師は福音自由教会の宣教師である車学淵という人物で、「元と某派の牧師であったが」、1911(明治44)年に「某派を脱し平安北道江界に於いて一個の独立教會を設立した」そうであると述べている¹⁰。渡瀬はひきつづき、車学淵が彼を訪問した経緯を次のように述べている。

車氏は江界に在つて薄々余の消息を探つて居つたさうであるが、余は更に車氏の事は知らなかつた。しかも崔牧師が全羅南北道の大東自由教會なる者を樹立して居ると云ふこと、並びに同氏が誤つて獄裡の人となつて居ると云ふことは聞いたが、(中略)十一月の十二日から余は公けの集會を、京城教會に於て催すことにしたが、恰度此の時車氏は全羅道の同志者から招かれ、其の善後策を講ずる為に出發し、途に京城を過ぎつた。而して鐘路に於て我が漢陽教會の廣告を見茲に日本人が朝鮮の同胞の為に傳道を開始したるの事實あるを確かめ、吾人の集會にも列席し、さてこそ余を訪問されたのであつた。¹¹

要するに、同じく自由派を目指す全羅南北道の崔牧師が逮捕される事件が起こり、全羅道の同志たちがその善後策を講ずるために車学淵を招いた。そこで車学淵は全羅道に向ったが、その道中でみた組合教会の広告に関心を持ち、渡瀬を訪ねた、というのである。渡瀬が「奇縁と云はふか、偶然とは云ふ」¹²と記しているように、その出会いによって、渡瀬の朝鮮における伝道旅行が実現されることになる。

2) 崔重珍の自由教会

さて、車学淵が所属していた自由派について説明するためには、前記引用文中のもう一人の登場人物、崔牧師について述べておく必要がある。ここに登場している崔牧師とは、1910年長老派の全北代理会地域で、反宣教師・反教権を主唱し、長老派から分派して自由教会を設立した崔重珍のことである。当時宣教師が伝道区域を直接担当しているなか、崔重珍は全羅北道の太仁、梅溪、井邑地方と全羅南道の境界地域を繋ぐ川安地方、そして宣教師たちの手が届かない扶安まで担当する唯一の朝鮮人伝道師であった¹³。1909年に牧師となり、太仁を中心に教勢を伸ばしていた。

しかし彼が担当していた地域は、宣教師が担当していた全州や群山に比べると財政的に貧弱で、教育施設と医療施設が皆無であった。その原因としては、全羅北道におけるいわゆる宣教センターは全州と群山にしかなく、宣教師が担当していたこれらの地域にのみ財政的な支援が活発に行われていたからである。そこで、財政問題の解決と教育・医療施設の設立を希望していた崔は、1910年1月5日に開かれた朝鮮イエス教長老会の全羅北道代理会に五つの項目を書いた手紙を送り、その五つの項目中、一つでも受け入れられない場合は、代理会を脱退するという強い立場を表明した。崔が全羅北道代理会宛に送った手紙の内容を紹介しておこう。

(前略)五つの項目中、一つでも受け入れられない場合は、むしろ天地の厳しい規制に縛りつけられず、主の功勞を誇りつつ無数の哀れな罪人を救済してみせます。その五つの項目中、第一は、学主人を立てることを今回の代理会において同意可決した上で、同じ日に行うべきであります。(中略)その法の厳しさの故に、教会では偽りと落胆、裏切り、無力が存在しており、悪魔が横行するのみです。(テモテへの第一の手紙、二章によると、入教人に対する法も異なります。)現在、我々の教会はまるでユダヤ教会の如く、ルカによる福音書十五節と七節において異邦の伝道者は現れておりません。あの無数の罪人を如何にして救うことが出来るでしょうか。今回の代理会で大恩を受けることによって、聖霊の宝剣で厳しい規律を切り取

り、罪人たちには主の自由をもって信仰を持たせ、キリストの枷の下で主を知らしめてください。第二は、地方を併せることです。(中略)その理由としては、私たちにも管轄出来る力量があり、そこの兄弟たちが分割されていることを寂しく思うと共に、また群山の下には地方が多いからであります。(中略)第三は、私が管轄している地方に高等学校を一つ設立することです。(中略)第四は、常救委員を二人ずつ配置させることです。その理由としては、百姓は愚かで、法は我々にあまりにも厳しく、結局は愛で主イエスの弟子であることを表すしかないからであります。(中略)第五は、家屋のことで恩恵を受けようと思います。(中略)一回だけでもこの窮乏に救いの手を差し伸べて下されば、命をかけて主のために生きていきます¹⁴。(翻訳と傍点は裏)

つまり、崔は教会の厳しい規制と教理のため、信者として名前を教会に登録する(「願入教人¹⁵」)ことはできても、信仰に対する学習問答を受ける資格(「学習教人¹⁶」)が与えられない状況や朝鮮の伝道師に対する経済的な待遇の改善を代理会に訴えかけているのである。かかる崔の要求に対する代理会の反応は強硬なものであった。全羅代理会は直ちに本事件に対する対策を講じ、まず崔に対する返事作成のために委員を集め、崔宛に次のような書信を出した。

請求された五つの項目を熟考した結果、学主と常求の件は我々長老教の規則にかかわる事柄で、代理会の権限外のことです。学校の件は教会の財政で設立するのではなく、特別に積立金を設けた後の話になります。地方を併せる件においては、高敞と茂長は南代理会が管轄する地方であり、扶安は沃溝地方に含まれており、今の状況からすれば今より管轄地方を拡げることは無理であります。家の件においては、老会が伝道師のために家屋を用意するお金と規則はありません¹⁷。

このように返事を送った後、さらに代理会は崔に対して背恩、背約、分別のなさ、不服従などの罪目を挙げて、代理会の最終決定が下るまで、自分の区域における堂会権の行使を禁止した。さらに代理会は崔が担当していた各教会宛に、崔の意に賛同する教会には一切の支援もないという内容の書信を送り、強硬な態度を表した。代理会のつよい制裁を受けた崔は反論として代理会に再び手紙を出したが、彼の要求は一切受け容れられなかった。ところが、崔と代理会が取り交わした手紙の内容を確認してみると、両者が先鋭に対立したのは、洗礼をめぐる資格問題であったことが見て取れる。代理会が各教会に送った以下の文書からも詳

細な内容が窺える。

崔重珍牧師が今回の代理会宛てに送った手紙における五つの項目の中、一項目でも代理会が受け入れない場合は、独立し教会を設立すると言っている。その五つの項目とは、(1)学主人(2)合地方(3)高校(4)常求委員(5)家屋の購入を要求するものである。この五つの項目を吟味した結果、有益なことがないだけでなく、教会においても莫大な害を与えるばかりである。崔牧師は良い方策を提案したと思っているだろうが、それはすでに新しいものではない。数百年前からイエス教が伝播された国においてすでに公論されたものである。(中略)第1の項目において、教会の規律が厳しいので、願入教人の替わりに学主人を立てて、その人が風俗を断念できなくても学主人として認めるといった議論は何も新しいことではない。それは、大韓において数年前に公論したことである。十三道における牧師と総代たちが集まって公論した上で決めたことであり、多数の人たちの知恵が一人の知恵よりは勝るはずである。教会の規律が厳しいと言われるが、そういうことはない。酒を口にする者と妾を囲う者に対して教会に来てはならないと言ったことはない。むしろ、愛情を以って励まし努力させたのである。ただ、その人たちに学主人の資格を与えていないのみである。実りがないのに、資格だけを与えることは神聖な教会を汚すだけである¹⁸。(翻訳と傍点は斐)

要するに、崔が代理会に緩和の要求を訴えていた規律とは、洗礼を与える資格問題であった。崔は教会に通う朝鮮の教徒なら誰でも洗礼が受けられる資格を教会が与えてほしいと要求したのである。当時洗礼を受けるためには、喫煙と飲酒、蓄妾を断念することが規則であったが、この規則があったため教会から離れていく朝鮮の教徒が多かった。崔はかかる状況を改善する方策として規律の緩和を主張したのである。しかし、代理会の宣教師たちは、これらの禁忌を犯す教徒に洗礼の資格を与えないという規律は朝鮮伝道においてすでに議論の余地のないことであると反駁した。

結局、洗礼の資格問題を中心に宣教師と先鋭に対立した崔は、自分の管轄にあったいくつかの教会を集めて自由教会を設立することになる。当時、崔重珍の「自由」は全羅北道代理会の各教会に反響を及ぼし、少なくない人々がそれに関心を示すか、もしくは支持したという¹⁹。その影響の中で、前述した車学淵も崔重珍の自由教会に意を共にし、平安道に独立教会を設立した一人であった。このような自由教会の影響は、1915年に後継者の問題をめぐって宣教師と対立し、メソ

ジスト系統の大韓基督教を脱退した忠清南道の申明均にも及んでいた。その後、反宣教師を表明して独立した車学淵と申明均の独立教会はそれぞれ、1912年と1916年に組合教会へ加入することになる。

3) 初めての伝道旅行

ここで、前述した渡瀬と車学淵の話に戻ってみよう。車学淵は渡瀬を最初訪問した1ヶ月後、再び渡瀬のところを訪問する。

余は車氏を送つて一ヶ月、各種の準備に傾注して居つた。十二月の半ば頃に車氏は再び京城の客となり、茲に余を訪問した。而して此の時車氏は全羅南北道の自由派が、同氏に全權を托して各地の教會相携へて加盟せんことを求むる旨を語られた。余は今日が日迄で全羅道の自由派のことを探究したこともなく、彼等を招致し度いと思つても居なかつた。しかし其の孤立無援の状態には竊かに同情を表して居つた。蓋し彼等が某派を脱して獨立したに就ては、議すべき事があつたかも知れぬが、其の志は諒とするに足る者があると思つて居つたからである。所が今此の一派が相携へて、我が教會に投ぜんことを請ふことになつた。奇縁と云はふか、偶然とは云ふものゝ、そこに天父の導きがないならば、逆もあり得ぬこと、思つたのである。車氏は余の返答を促した。余は徐ろに自由派の由来現状、その他派との關係等を詳細に問ふた、而して二日間其の返答を延ばさんことを求め、緩談の後ち同氏を送つた。²⁰

この引用文によれば、当時渡瀬は自由派のことは知っていたが、伝道の対象としては考えていなかったことが見てとれる。渡瀬が言っているように、偶然でもあったこの出会いによって、車の訪問を受けてから二日後、渡瀬は全羅道自由派の日本組合教会への入会を承諾することとなる。承諾を得た以上、一日も早く入会式を行いたいという車の願いで、渡瀬は1912年1月2日、ソウルを出発して全羅道へ向かう。最初の伝道旅行であった全羅北道で入会式が行われ、その際に渡瀬が加入させた朝鮮人教会は11カ所であった。さらにその後、渡瀬は同地域で「伝道師牧師の盡力、信者の奮發に由り、今は更に九個を加へて来た。これで全羅南北道には大小二十の教會ができた」²¹と述べている。最初の伝道旅行で思いもよらぬ成果を収めた渡瀬は、引き続き、同年4月、忠清南道における伝道旅行の道を開くこととなる。その結果、忠清南道では4カ所の教会、約400人の入教者を得ることができた²²。

このような反宣教師的教会との出会いは、京城と平壤を中心に朝鮮伝道を行っ

ていたものの、もっともらしい実績を見せていなかった渡瀬にとって、朝鮮伝道を軌道に乗せる原動力となったのであろう。なぜなら、1920(大正9)年に日本組合教会便覧に乗せられた組合教会朝鮮人教会地方別統計表を見れば、全羅北道と忠清南道の教会数が、京城の5箇所に対し、それぞれ58箇所と23箇所にもものぼっている。この数値から、全羅と忠清地域における独立教会の加入が、組合教会の朝鮮伝道における基盤となったことが見てとれる²³。

繰り返しになるが、車学淵が最初に渡瀬を訪問した当初は、自由教会の崔重珍と手を携えて全羅南北と平安北道でそれぞれ活動を行っていたが、崔牧師による事業の失脚から会員の既成教派への復旧が余儀なくされ、全羅南北の同志者が減少していた状況であった²⁴。このような状況に置かれていた車は、渡瀬から聞いた組合教会の歴史と朝鮮伝道の方針を全羅南北の同志者たちに伝えることになり、これによって全羅南北の同志者たちは組合教会への加入を決心したのである²⁵。むろん、渡瀬が車から組合教会の歴史と朝鮮伝道の方針について質問され、それに答えたという短編的記録は残っているものの、その詳しい内容を知る史料は管見の限り残存していない。しかし、『朝鮮教化の急務』の中で、渡瀬は日本における組合教会は外国伝道会社から「自給・自立」した教会であることを強調している。

一般傳道上には米國傳道會社の補助金を受け、以て傳道の用に供したのである。(中略)

幾多の苦痛と困難はあつたが断然明治二十九年に於て之を謝絶したのである。(中略)

更に同三十八年には米國傳道會社の補助の下に在りし三十の教会を引き受け、同四十一年には畧之を獨立せしめて仕舞つた。如此くにして米國の傳道會社とは友情の下に助力し合ふの外には、互ひに權利義務の關係もなく、彼れも自由に行動し、我れも自由に行動し、而かも其の間に提携の實を擧げ、親密の交際の中に、事業の上には全然獨立と自由を保留して今日に及んだのである²⁶。

この引用文によれば、日本組合教会は米國伝道会社(アメリカンボード)からの経済的独立を1905(明治38)年に達成し、1908(明治41)年には各教会を独立させている。しかも、アメリカ宣教師とは対等な関係を保ちつつ、何処の教派にも隷属しない「自治・独立」教会であることが強調されている。このような「自給・自立」教会を経営方針としている組合教会のこの特徴が、全羅南北道の独立教会にとっては、組合教会への加入を促す原動力となっただろう。とりわけ、どこの教

派からも制約されない日本組合教会の教派的立場は、既成教派から逸脱していた独立教会にとっては「心地のいい場所」として考えられたのかもしれない。それは、渡瀬が「断然米国の寄付金を謝絶し」、「自由的傳道方針を取」らなかつたならば、「今日朝鮮傳道を為すにも、自由の行動を執ることが出来なかつたかも知れ」ないと述べていることから窺える²⁷。

こうした朝鮮の独立教会の加入によって、渡瀬の朝鮮傳道は軌道にのることとなる。その中で、渡瀬は1914年に朝鮮傳道の必要性を訴える『朝鮮教化の急務』を出版する。次章では、『朝鮮教化の急務』を中心に渡瀬が朝鮮傳道の論理をどのように組み立てていたかをみていくことにしよう。

3. 渡瀬の朝鮮傳道における論理

『朝鮮教化の急務』の最初のページをめくってみると、何枚かの写真が載せられている。最初の写真は3人の人物写真でその人物とは小崎弘道、海老名弾正、宮川経輝である。この3人は日本組合教会における三元老で、いずれも熊本バンドの出身で同志社英学校の第一回卒業生でもある²⁸。次に載せられている写真は、同志社の全景を撮った写真である。渡瀬は組合教会と同志社との関係を、「組合教会は、日本に於ける最も健全なる教會として」使命を果たしつつあると共に、「其の教育上に於いて直接間接」少なからぬ努力を為しているとしている。「同志社大学の如き固より直接の経営」はしていないものの、「組合教会とは切っても切れない」関係をもって、お互いに助け合っていると述べている²⁹。さらに同志社との深い関係は朝鮮教化の正当性として次のように展開されていく。

同志社が日本の教育界に立つて貢献した所は、決して尠小ではない。(中略)其の外男女學校にして、我が組合教會の補翼を受けし者(中略)我が精神界に重きを為しつつある新聞雑誌の類にして、我が組合教會に關係あるもの等亦少なくはない。(中略)我が組合教會が日本に於ける最も堅實なる思想の藪淵(ママ)純良なる信仰の源泉として、各方面に盡瘁しつゝある(中略)如此き地位を日本に有する吾人が、我が國民を代表して、朝鮮の教化を企圖するも、決して僭越の謗を受くることはないと思う。獨り我が日本五千萬同胞の確認を承くるの權利あるのみならず、吾人は歐米諸國の教會及び宗教家も、亦た我が教會の事業を制肘若しくは危惧するの必要なきを主張し得るの權あると思ふ³⁰。

この引用文においては、日本の五千萬同胞を代表して朝鮮教化を行うことは日本組合教会にしかできないという強い自信感が見てとれる。その自信感を証明

づける実際の根拠として渡瀬は、次のページに第1回朝鮮大会の写真を載せている。この写真を撮った場所は京城教会で、内地人と朝鮮人の合同礼拝の光景が写されている。参加者は殆んど男性で女性の姿は見当たらない。第1回朝鮮大会は内地人の教会たる京城教会での開会式を皮切りに、1913年8月1日から5日間京城で行われた。参加者は地方代員及び京城の代員そして内地からの来賓と朝鮮会員の約300名が集まった³¹。大会の内容は第一日目の組織会と開会式、第二日目は総督府訪問、第三日目には、日本と朝鮮教徒たちの総合礼拝、第四日目は、講演と議事、第五日に市内視察と大親睦会が行われた³²。1912年から1913年にかけて着々と朝鮮における教会と信者数を伸ばしていた渡瀬にとって、第1回朝鮮大会の写真は朝鮮伝道に対する自信と可能性を見せ付ける一枚になったであろう。

しかし、その朝鮮伝道に対する自信と可能性が向かう決着点がいかなるものであったのかは、次のページに乗せられた写真に如実に現れている。新朝鮮の姿として登場する朝鮮総督府庁舎、東洋拓殖株式会社、朝鮮銀行の建物を写しているそれぞれの写真がそれである。この写真に登場する建物は、いずれも近代式建物で、日本が朝鮮をいかに近代化させたのかを見せ付けるためのものである。さらに朝鮮の南から北までの発展振りを釜山停車場と鴨綠江開閉橋の写真で見せ付けている最後の写真は、渡瀬が『朝鮮教化の急務』をいかなる立場と意図をもって著しているかを明らかにするものである。では、ここからはその本文に入り、渡瀬の朝鮮教化に対する詳細な論理を窺ってみよう。

渡瀬は『朝鮮教化の急務』の序文において、朝鮮が「今や我に併合せられ、我が國家は其の精力を集注して、その開拓と其の進歩を促し」た結果、「併合後僅かに三周年に過ぎぬが、其の変化の著しさには、何人も一驚を喫せぬものはない」と強調しつつ³³、精神上における宗教の必要を以下のように力説している。

併し政事經濟上の事が如何に、其の善美を盡しても此れは矢張り外部的の方面に止まるは己むを得ぬのである。(中略)宗教道德上の感化が、其の根底を為して、サテ其の上に右の事實が加はつて来ると、消化機関が滋養物を消化するが如くに、一切の施設も人心の深き處に達する時には、政事經濟と云う様な外部的現象として、なく、一種有難い感謝すべき精神的現象として了解されるので、此れがやがて民族悦服の基礎となり、心魂に徹する感恩の念ともなるので、此の尊い感念を發生湧起せしむる素地を造るのは宗教ではなくてはならぬ³⁴。

さらに、渡瀬は、「朝鮮民族の教化が多くの外国人」によってなされているこ

とを懸念しつつ、日本に併合された朝鮮民族を教化するのは日本人の手で行われるべきであり、それこそが真の併合であると述べている³⁵。したがって、朝鮮人の教化には「人類としての教化問題と国民としての教化問題」という「二重の問題」があるとする。その二つの教化問題を渡瀬は次のように記す。

朝鮮人を教化せんとする宗教家は、朝鮮人を人類同胞の立場より、之を単に宗教的信仰に導くと云ふに止めず、更に一步を進めて日本と併合せられた朝鮮人として、其の最も幸福なる道行きは如何にすればよいかと云ふことを考へ、多少彼等の心中には反抗心があつても、それを説き曉して日本國民として立つの覚悟に到着せしめねばならぬ。(中略)若し朝鮮民族が日本國民たるの自覚を持つことを拒み、永く反抗的心状態を有して居るならば、其の不幸は一通りではない、進歩もなく、發達もなく、随つて希望もなく、自暴自棄あるのみである³⁶。

このような教化をなしうるのは、日本の宣教師のみである。その理由は、「日本國民たるの自覚を得せしむると云ふことは、宗教家間接の任務である」とともに、これを可能にするためには、「充分に日本國の歴史と、その立國の精神を了解し、此れと共に併合の事実に同情し、其の真意を了解せねばならぬから」、日本人でもない外国の宣教師に国民としての教化を望むのは残酷なことであるという³⁷。だが、その組合教会が行う朝鮮教化は、あくまでもキリスト教によるものであり、このキリスト教による朝鮮教化こそ「皇運を扶翼し、之に国民道徳に資する」ものとなるというのである。

假令基督教にても、之に由りて朝鮮人の教化が完うせられ、之に由りて其の日鮮間の籬が取り去られ、同化の實が擧り、我れよりして云へば併合の理想が實現すればそれで善いのではあるまいか。吾人は現に基督教に由りて皇運を扶翼し、之に由りて國民道徳に資して居る。されば之に由りて朝鮮の民草を教化し、彼等を忠良の臣民と為すに難い筈はないと信ずるのである³⁸。

こうして、渡瀬は最後に朝鮮教化のことを次のように国民的運動として訴えているのである。

我が日本組合教會の單獨の力を以てしては、此の急潮岸を打つ様な朝鮮民心の大變化に應ずる丈けの傳道事業を施すの餘裕がないのである。(中略)

これは前にも述べた通り、吾人が一には新同胞を思ふの餘り、一には日本帝國の将来の爲には、一刻も猶豫して居るべきでないと考えたからである。(中略)此の上は廣く我が國民全體に訴ふる外はないのである³⁹。

終わりに

以上のような考察を通して、日本組合教会の朝鮮伝道の背景には当時アメリカ宣教師と洗礼を与える資格の問題をめぐる先鋭に対立し、アメリカ宣教師から独立を果たした自由教会が存在していたことが確認できた。

本論で詳しく述べることはできなかったが、アメリカ宣教師と崔重珍が対立していた洗礼をめぐる資格問題の背景には蓄妾に対する両者の異なる認識が存在していた。蓄妾を旧弊の打破すべき対象として捉える宣教師側に対して、崔重珍の朝鮮側は蓄妾に対する規律を緩和させることで、多くの朝鮮教徒が自由に信仰生活を享受できるよう求めたのである。その対立の結果、崔は自分の管轄にあった教会を集めて宣教師から脱退して自由教会を設立し、1912年に自由教会のいくつかの教会が日本組合教会に加入することとなる。渡瀬が『朝鮮教化の急務』のなかで、初期朝鮮伝道を「何もない炭鉱の中で銀を探している」ような辛い日々であったと回顧していることから窺えるように、全羅地域における自由教会との出会いとその加入が朝鮮伝道の基盤となったのは間違いない。そして、自由教会の加入は、渡瀬の朝鮮伝道における伝道方針を大きく変え、ついに朝鮮教化という名目で「国民的運動」として主張されるようになったのである。

つまり、蓄妾をその背景とする崔重珍の自由教会は、単に反宣教師をその目的とする教会ではなかったのである。それは当時の朝鮮においてキリスト教を伝播する側とそれを受け容れる側の相互作用の中で形成されていた一種の文化的摩擦の現われであったと捉え直すべきであろう⁴⁰。というのは、崔と宣教師のあいだで洗礼の資格問題をめぐって繰り広げられていた対立は、キリスト教的価値観と教理を強要するアメリカ宣教使側とそれを受け容れる朝鮮側のせめぎあいであったからだ。そのせめぎあいは、アメリカ宣教師側のキリスト教的価値観と教理に「同化」しつつも、それらをくつがえす朝鮮側の「抵抗」でもあった。崔が宣教師と対立しつつ、洗礼を与える資格の緩和を要求して独立した一連の出来事は、朝鮮側の「抵抗」としても捉えられるだろう。そして、組合教会の朝鮮伝道は、崔の自由教会との出会いという歴史的な必然性のなかで表出する「抵抗」と「同化」の交差、そしてアメリカ宣教師、朝鮮教徒、日本人宣教師の三者の相互関係と連続性の場において、同時代的に行われたのである。

しかし、ここで述べる「抵抗」と「同化」の問題は二項対立的な関係のなかで生じる二分法的な思考ではない。崔重珍の自由教会を通して明らかになったこと

は、当時朝鮮の教徒たちが日本と西欧の関係のなかで自分の信仰をどう位置づけていたのかである。崔は蓄妾を肯定することで、西欧のキリスト教に「同化」されることを自ら拒んだのである。そして、当該期の朝鮮の教徒たちは、「抵抗」と「同化」ではない、「創造」という行動様式を通して西欧のキリスト教とは異なるキリスト教を形成していく。紙面の関係上、詳しくは別稿に譲るが、まさしくその「創造」の一例として取り上げられるのが儒教の祭祀問題である。当時宣教師は祭祀を偶像崇拜として厳しく禁じていたものの、朝鮮の教徒たちにとって祭祀を放棄することは、地域社会との断絶を意味することであって、キリスト教を信仰しない家族とも葛藤の原因となっていた。さらに、祭祀の問題によるキリスト教徒の自殺が相次ぐほど、社会的問題にもなっていた。そのなか、朝鮮の教徒たちは新しい「儀礼」として「追悼礼拝」を創り上げることで、祭祀に替わる「儀礼」を「創造」していくのである。

だが、このような蓄妾と祭祀問題をその時代的背景として有する崔の自由教会を、アメリカ宣教師から独立を図った土着教会の一形態として捉えてはいけない。自由教会を当該期朝鮮における土着の一面として位置づけた途端、その議論は「民族」を単位とする「一国史」の眼差しから逃れられなくなるからである。

したがって、植民地朝鮮における宗教的状况は、伝播する側とそれを受け容れる側の「同化」と「抵抗」だけではなく、受け入れる側の「創造」までを含む相互関係のなかで、「同化」、「抵抗」、「創造」を繰り返しつつ形成されていくのである。結論を述べるならば、崔の自由教会をめぐる一連の出来事は、‘religion’の翻訳語として伝播された宗教概念の導入が、植民地朝鮮でどのような問題を生じさせ、それをめぐって朝鮮人牧師、西欧宣教師、そして渡瀬のような日本人キリスト教者がそれぞれどのように行動していたかを如実にみせてくれる歴史的イベントであったといえよう。むろん、本稿では宗教概念の問題を主として扱ってはいないが、今後の課題として、‘religion’の翻訳語としてアジアに伝播された宗教概念の問題⁴¹を中心に、植民地朝鮮における西欧・日本・朝鮮の三項関係を考察する必要があるだろう。

註

- 1 梁賢恵『近代日韓関係史の中におけるキリスト教』梨花女子大学出版部、2009年、56頁。
- 2 諸点淑「東アジア植民地における日本宗教の「近代」— 植民地朝鮮における日本仏教の社会事業を事例として」2008年度立命館大学博士学位論文、2008年。
- 3 Kim Taehoon, “The Place of ‘Religion’ in Colonial Korea Around 1910—the Imperial History of ‘Religion’,” *Journal of Korean Religions* Vol.2, No.2 Institute for the Study of Religion, Sogang

University (Oct. 2011), pp.25-46.

- 4 飯沼二郎・韓哲曦『日本帝国主義下の朝鮮伝道 — 乗松雅休・渡瀬常吉・織田檣次・西田昌一』日本基督教団出版局、1985年、66頁。
- 5 京城学党については、稲葉継雄『大日本海外教育会の旧韓国における教育活動』昭和60年度筑波大学学内プロジェクト研究報告書、1985年、同「京城学党について — 旧韓末「日語学校の一事例 —」」『日本の教育史学』第29集、1986年、尹建次『朝鮮近代教育の思想と運動』東京大学出版会、1982年、飯沼・韓、前掲書、などを参照。
- 6 織田檣次『チゲクン』日本基督教団出版局、1977年、194頁。
- 7 飯沼・韓、前掲書、162頁。
- 8 同上、170頁。
- 9 渡瀬常吉『ひづめの跡』警醒社書店、1914年、1頁。
- 10 同上、2頁。
- 11 同上、4頁。
- 12 同上、5頁。
- 13 陸奇壽「崔重珍研究」2002年度全州大学修士学位論文、2002年、22頁。
- 14 「全羅北道代理会録」『全羅老会会議録 第一回～第三十六回』大韓イエス教長老会全羅老会、2000年、47-52頁。
- 15 信者になることを決心し、教会名簿にその名前を登録した上で教会に出席する者を称する。
- 16 13歳以上の願入教人で教会に出席してから6カ月以上経つ者が、堂会の前で信仰に対する学習問答の後、許可を得て書約された者を称する。学習教人になった者は洗礼を受ける資格が与えられる。
- 17 前掲「全羅北道代理会録」66頁。
- 18 同上、75-76頁。
- 19 渡瀬、前掲書、53頁。
- 20 同上、4-5頁。
- 21 同上、25頁。
- 22 同上、37-38頁。
- 23 一方、全羅地域における組合教会の急速な勢力伸長について、この地域が東学農民運動の発生地であったため、この地域の反封建、反日運動の情緒を制圧するために組合教会がこの地域に力を入れて伝道活動をしたという見解がある。しかし、本文で述べたように、渡瀬が残した著作にはこれに関する内容が窺えるところは見当たらない。
- 24 渡瀬、前掲書、3頁。
- 25 同上、4-5頁。
- 26 渡瀬常吉『朝鮮教化の急務』警醒社書店、1913年、32-33頁。
- 27 同上、34頁。
- 28 竹中正夫「日本組合基督教会の歴史と課題 — その百年にあたって」『基督教研究』第48巻第2号、1987年、141頁。
- 29 渡瀬、前掲『朝鮮教化の急務』34頁。
- 30 渡瀬、前掲『ひづめの跡』34-35頁。

-
- ³¹ 同上、78 頁。
- ³² 同上、80 頁。
- ³³ 渡瀬、前掲『朝鮮教化の急務』1 頁。
- ³⁴ 同上、7-8 頁。
- ³⁵ 同上、3 頁。
- ³⁶ 同上、11 頁。
- ³⁷ 同上、12-13 頁。
- ³⁸ 同上、96-97 頁。
- ³⁹ 同上、94 頁。
- ⁴⁰ 当時朝鮮の教徒たちにとって蓄妾問題は家族と親族共同体からの断絶につながる問題であり、生計にかかわる問題でもあった。かかる朝鮮の人々が経験していた葛藤と苦しみを崔は基督教が有する「暴力」として理解していたのではなかろうか。崔がアメリカ宣教師たちに抱いていた反感は厳しい規律によって苦しんでいる信者たちの悲しみが見えない宣教師たちの無頓着と優越感であり、こういった崔の反感がほかの地域でも共鳴していったのである。
- ⁴¹ ‘religion’の翻訳語として日本に伝播された宗教概念の問題については、磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜 — 宗教・国家・神道』岩波書店、2003 年を参照。

An Inquiry into Kumiai Kyōkai in the Korea Mission: Focusing on Watase Tsuneyoshi's First Mission Period

BAE GWEI-DEUK

Doctoral Student

Graduate School of Letters, Ritsumeikan University

Abstract:

Watase Tsuneyoshi, as a member of the Japan Kumiai Kyōkai, initiated the Japanese missionary effort in Korea from 1911. However, he despaired over the fact that the number of converts had stagnated despite his missionary efforts in Kyeongseong (京城) and in Pyeongyang (平壤). Prior to his missionary efforts, he conferred with the liberal faction (jiyuuha, 自由派) that in 1910 had taken a position against the American missionaries and their privileges. The liberal faction at the time referred to the Liberal Church (jiyuu kyokai, 自由教会) of Choi Joong jin (崔重珍), that had gained independence from the Presbyterians in the midst of problems concerning American missionaries and their qualification to grant baptisms in the region of Jeollabuk-do (全羅北道). The clash between the Liberal Church of Choi Joong jin and the American missionaries centered around discrepancies in the meaning of the rites and the traditional Korean practice of concubinage (chikushou, 蓄妾).

From then on, Watase's Korean mission was supported by the Independent Church of the liberal faction. In this way, the number of churches and converts grew. In other words, the inclusion of the Independent Church greatly transformed the direction of Watase's Korean mission. Eventually, under the banner of "Educating Korea," his movement was advocated as a "National Movement." Furthermore, Watase's education of Korea was said to be completely founded on his Christian faith. Using his faith, he carried out the Korean mission both for the sake of the Korean people and for Japan's imperial efforts. However, there is an issue which warrants mention here. Watase's missionary activities must be analyzed both from a subjective point of view and from an objective point of view, keeping in mind the context of the prevailing ethos of his day as well as the vantage point of the present.

Keywords: Kumiai Kyōkai, Watase Tsuneyoshi, The Liberal Church, Korea Mission, National Movement.